

アンケートにお答えいただく前にぜひお読みください

江田島市の学校の状況について



【本資料は、以下のような内容が書かれています】

- ◆江田島市はどんな教育を行っているの？ → 3ページへ
- ◆今後の各学校の児童生徒数はどうなるの？ → 7ページへ
- ◆児童生徒数が減るとどんな影響が出るの？ → 11ページへ
- ◆複式学級になるとどんな影響が出るの？ → 13ページへ

はじめに

今、江田島市的小中学校では、児童生徒数の減少という大きな課題に直面しています。

少子化による児童生徒数の減少は、全国的な課題であり、本市だけ例外というわけではありませんが、とりわけ本市の児童生徒数は、今後急激に減少することが予想されています。

本市では、今年度より、学校規模適正化委員会を立ち上げ、小中学校の適正規模・適正配置の検討を始めました。学識経験者や保護者代表の方々、そして市内各種団体の代表の方々による話し合いがスタートしています。

そのような場において、現在こどもを市内の学校に通わせておられる保護者の方々、そしてこれから通わせようとされておられる保護者の方々の御意見は非常に貴重なものとなります。

この資料は、今後の児童生徒数の減少予測、小規模校のメリット・デメリット、そして現在の本市の教育の取組を知っていただくために作成しました。

ぜひ、この資料を御一読のうえ、これから江田島市の学校のあり方について考えていただき、アンケートを通して皆様のお考えをお聞かせいただければと思います。

御協力のほど、よろしくお願ひいたします。

適正規模・適正配置とは

適正規模とは、教育効果を最大限に高められるとされる学校規模のことです。

国では、小中学校的学校規模（学級数）の標準を設定しており、**小中学校ともに、12学級以上、18学級以下**とされています。

これを各学年で考えると、小学校の学級数は各学年2～3学級、中学校的学級数は各学年4～6学級が標準となります。

ただし、このことについては、地域の実態その他により特別の事情のあるときはこの限りでない、とされており、必ずしも国の設定する適正規模でないといけないというわけではありません。現在、江田島市の学校はどの学校も国の標準に達していません。ですから、江田島市の実情を踏まえた適正規模を考える必要があります。

適正配置とは、市の児童生徒数の分布、交通アクセスなどを考慮し、学校を適正な場所に配置することです。

※青字は小学校の場合
※緑字は中学校的場合

小学校 学級数	中学校 学級数
1	1
2	2
3	3
4	4
5	5
6	6
7	7
8	8
9	9
10	10
11	11
12	12
13	13
14	14
15	15
16	16
17	17
18	18
19	19
20 以上	20 以上

複式学級が存在する規模
※広島県は中学校的複式学級編成は行わない

複式学級が存在する規模
クラス替えができない規模

全学年ではクラス替えができない規模

クラス替えができない規模

全学年ではクラス替えができない規模

全学年でクラス替えができる規模

半分以上の学年でクラス替えができる規模

小学校、中学校ともに文部科学省の定める適正規模
小学校：各学年2～3学級
中学校：各学年4～6学級

大きすぎる規模 大きすぎる規模

I 学級の人数について

I学級の児童生徒数は、これまで小中学校共に40人以下とされていましたが、法令改正により段階的に35人以下へ引き下げられています。令和10年度には全学級が35人以下となります。

小学校では、2つの学年合わせて16人以下（1年生を含む場合は8人）の場合は複式学級となります。

なお、中学校では、広島県においては複式学級編成は行わないことになっています。

江田島市がめざすこれからの教育に

江田島市教育委員会 基本理念

生涯を自立的に生き抜き 未来を切り拓く力を育成する教育の推進



小中学校教育の充実

基本方針	小項目	概要
知・徳・体のバランスのとれた育成	確かな学力の育成	個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実に取り組み、確かな学力を育みます。
	豊かな心の育成	家庭や地域と連携し、発達段階に応じた道徳教育及び人権教育を推進を推進します。
	健やかな体、スポーツを通じた豊かな心身の育成	学校体育の充実に取り組みます。また、地域の特色を生かしたスポーツに親しませていきます。学校保健や学校給食の充実にも取り組みます。
持続的な社会の創り手となりうる資質・能力の育成	キャリア教育の推進	中学校の職場体験学習を始め、発達段階に応じて、夢や希望の実現に向けたキャリア教育を推進します。
	探究的な学習の推進	地域や社会の課題解決型学習や興味・関心に応じた探究的な学習を推進します。
江田島市独自の魅力的で特色ある教育の展開	「さとうみ学習」の推進	郷土への愛着・誇りを持った「さとうみっ子」の育成を目指し、特色のある教育「さとうみ学習」を推進します。
多様な教育ニーズへの対応の推進	多様な教育ニーズへの対応①	特別支援教育、外国籍児童生徒への支援等の推進に取り組みます。
	多様な教育ニーズへの対応②	不登校児童生徒への支援（教育支援センターの設置等）に取り組みます。
	グローバル社会に対応する教育の推進	外国語活動および外国語科の充実に取り組みます。
教育デジタルトランスフォーメーション（DX）※1 の推進	教育DX・デジタル人材の育成（校内）	1人1台端末を活用し、こども達の情報活用能力の育成に取り組みます。
	教育DX・デジタル人材の育成（校外）	こどもたちが「いつでも」「安全に」「テクノロジーに触れられる」施設の実現に向けて取り組みます。
校種間の連携の推進	幼小中高をつなぐ校種間連携の推進	異なる校種で連携し、こどもたちの交流及び教職員研修等の充実に取り組みます。
教職員の資質・指導力の向上	教職員の資質・指導力の向上	教職員研修を充実させ、教職員の資質及び指導力の向上に取り組みます。

※1 「教育デジタルトランスフォーメーション（DX）」

デジタル技術を活用して教育の質や効果を飛躍的に向上させ、教育システムや学習の形態を根本的に改革すること。

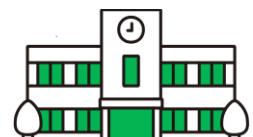
について紹介します

学校と家庭・地域との連携・協働



基本方針	小項目	概要
学校と地域・家庭がパートナーとなって取組を進めていくための新たな仕組みの構築	地域とともにある学校づくりの推進	市内全小中学校において、コミュニティ・スクールを導入し、地域と一体となってこどもたちを育む学校づくりを推進します。
大柿高等学校の存続に向けた支援	広島県立大柿高等学校へのサポート事業の実施	県立大柿高等学校の存続に向けた支援を行い、地元の生徒が自分の夢を叶えることができる高等学校の一つとしてあり続けられるよう支援を行います。
部活動の地域展開の推進		部活動の地域連携（部活指導員の配置）や地域クラブ活動への移行に取り組みます。
地場産品を使った学校給食の提供		地場産品を学校給食に積極的に取り入れることで、地産地消を推進するとともに、児童生徒の郷土の食に対する愛着を育くみます。

学校教育環境の整備



基本方針	小項目	概要
学校施設の修繕、設備や教材及びICT環境の充実	学校施設・設備の管理・整備	学校施設・設備を適切に維持管理するとともに、計画的な整備に取り組みます。
	学校図書館リニューアルの実施	こどもたちの本に対する親しみの醸成と読解力の向上を図るため、書籍や設備の更新を行う学校図書館のリニューアルを行います。
	ICT機器の整備 校務DXの推進	1人1台端末環境の維持、デジタル教科書・教材等の導入を進めます。また、校務DXを進め、学校における働き方の改善に努めます。
学校規模の適正化及び適正配置	学校の適正配置	地域の実態を踏まえた上で、少子化・人口減少時代に対応した学校の適正配置を検討していきます。
	通学支援の実施	学校統合や指定校変更により遠距離通学となったこどもたちのため通学手段の確保、定期券補助を行います。
教職員が元気・笑顔で勤務できる環境の充実		教職員の長時間労働を抑制し、心身の健康維持と仕事と生活の両立を支援することで、教職員の働きやすい環境づくりを目指します。

江田島市の推進する教育の特徴的な取組

「主体的・対話的で深い学び」の実現

近年、教室には、以前にも増して、多様なこどもたちが集まつてくるようになりました。発達障害や特異な才能をもつたこども、外国籍のこどもなど、多様化が進んでいます。当然ながら理解のスピードも、学びやすい方法も異なっており、これまでのみんなが一緒に同じことを同じ方法で学ぶ、いわゆる一斉授業のスタイルは限界にきています。

これまでの、みんなを「そろえる」教育から、一人一人の可能性を「伸ばす」教育へ。

本市では、こども一人一人の特性や理解度等に応じ、教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行ったり、支援の必要なこどもに重点的な指導を行ったりする学びづくりに取り組んでいます。

これまでの課題

これまでの授業は、教師が前に立って指導し、みんなが一緒に、同じことを、同じ方法で学ぶ、いわゆる一斉学習のスタイルが中心でした。長年の蓄積ある、効率的な指導方法である一方、こんな課題も・・・



これからの学び

個別最適な学び

「個別最適な学び」とは、こども一人一人の特性や理解度等に応じ、教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行ったり、支援の必要なこどもに重点的な指導を行ったりする学びです。また、こどもの興味・関心・キャリアの方向性などに応じて、学習に取り組む機会を提供する学びでもあります。



協働的な学び

「協働的な学び」とは、こども同士が教え合ったり、助け合ったりする学びです。

また、地域の方々や多様な他者との出会いや対話を通して、自分の考えを広げたり深めたりする学びでもあります。



自分に合った進度や方法で



1人1台端末を活用して



ともに学び合いながら



様々な方との出会いを通して

事例について紹介します

さとうみ学習の推進

島っ子の特権を教育に。

本市では、郷土への愛着・誇りを持った児童生徒「さとうみっ子」の育成を目指し、特色のある教育「さとうみ学習」を推進しています。



各学校の実践を、事例集にまとめています



詳しくは
こちら

コミュニティ・スクールの推進

「開かれた学校」から「地域とともにある学校」へ。

学校と地域がパートナーとなって取組を進めていくための仕組み「コミュニティ・スクール」を市内全小中学校で導入し、地域と一体となってこどもたちを育む学校づくりを推進しています。



詳しくは こちら

学校図書館リニューアル

こどもたちの本に対する親しみの醸成と読解力の向上を図るため、書籍や設備の更新を行なう学校図書館のリニューアルを市内全小中学校で行っています。

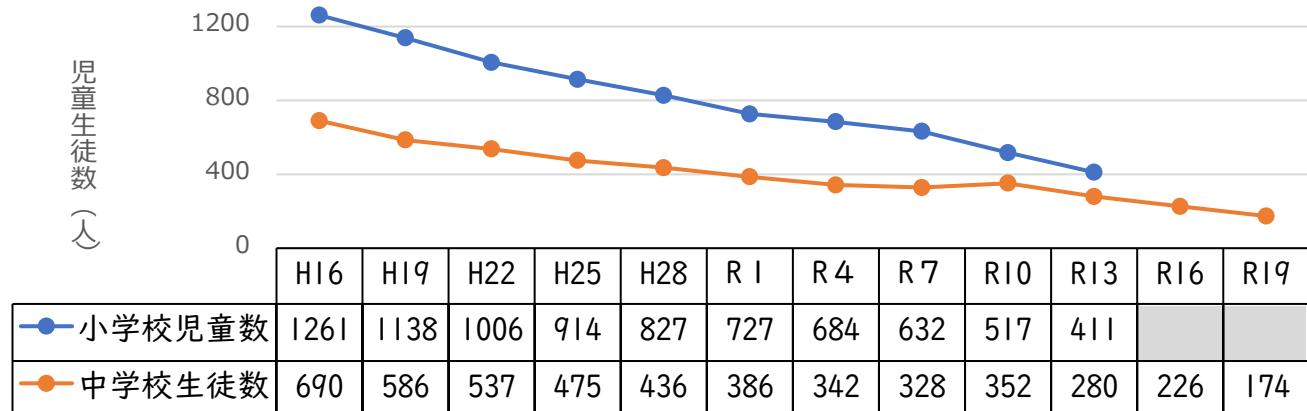


詳しくは
こちら

一方で児童生徒数の減少という大きな

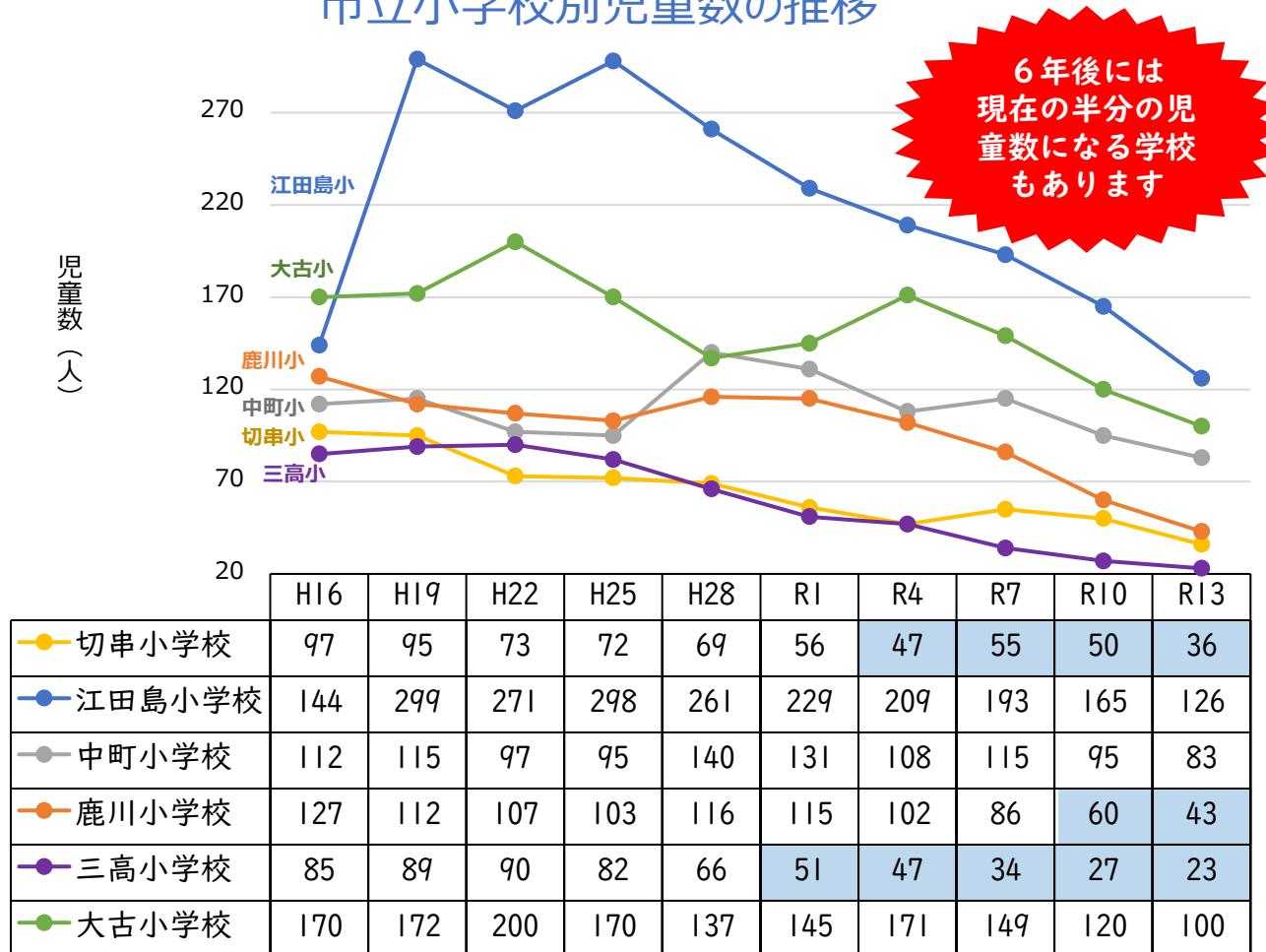
市内の小中学校では、児童生徒数の減少が急激に進み、学級の人数が極端に少なくなりかねない状況が生じ始めています。令和13年度には、**市内6つの小学校のうち、3つの小学校が複式学級のある学校となり、そのうち2校は完全複式の学校となる見通しです。**

江田島市全体の児童数及び生徒数の推移



※児童生徒数に関しては、令和7年度までは5月1日時点の人数、令和8年度以降は、住民基本台帳に基づき算出しています。

市立小学校別児童数の推移



※枠内を**青色**で示した年度は複式学級が存在する規模です。

課題に直面しています

6年後（令和13年度）各学校学年別児童数見込

※枠内を青色で示す学年は複式学級となる見通しです。（1年と2年で8名以下、3年と4年で16名以下、5年と6年で16名以下）

切串小学校



	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
男	1	1	4	2	3	6	17
女	0	4	3	6	2	4	19
計	1	5	7	8	5	10	36

↑ 全ての学年が複式学級となります。

江田島小学校



	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
男	6	18	9	11	12	20	76
女	8	4	7	13	14	4	50
計	14	22	16	24	26	24	126

中町小学校



	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
男	3	7	11	8	8	4	41
女	7	6	9	7	4	9	42
計	10	13	20	15	12	13	83

鹿川小学校



	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
男	3	2	2	6	7	2	22
女	3	3	2	6	3	4	21
計	6	5	4	12	10	6	43

↑ 4つの学年が複式学級となります。

三高小学校



	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
男	2	1	1	2	4	0	10
女	3	2	0	3	4	1	13
計	5	3	1	5	8	1	23

↑ 全ての学年が複式学級となります。

大古小学校



	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
男	5	9	9	8	3	16	50
女	10	4	5	9	13	9	50
計	15	13	14	17	16	25	100

※児童生徒数に関しては、令和7年度までは5月1日時点の人数、令和8年度以降は、住民基本台帳に基づき算出しています。

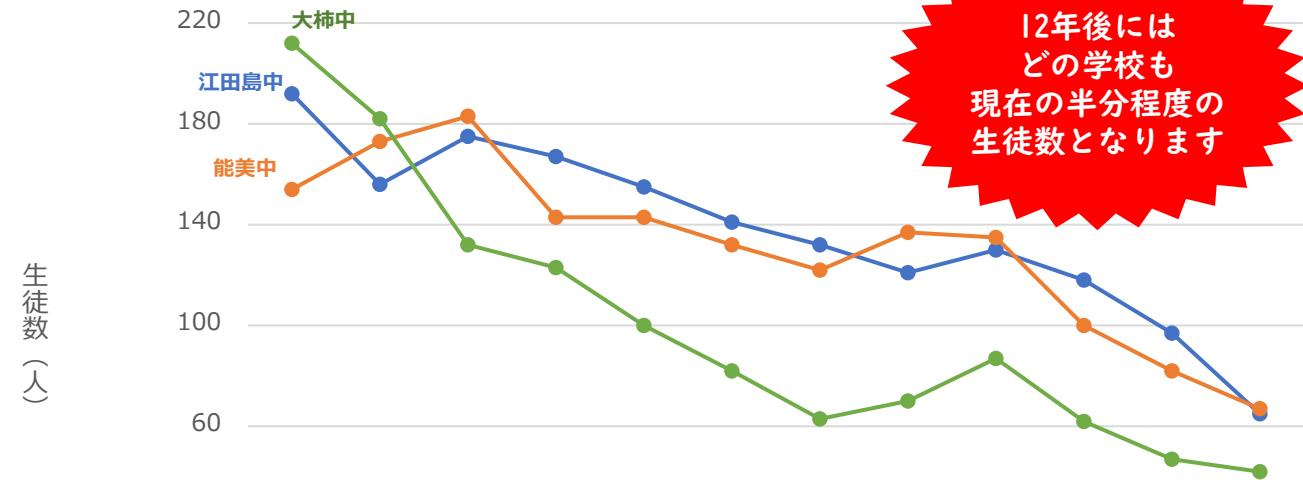
そのため、ここに示した児童数は今後変化する可能性があります。

※通常学級及び特別支援学級の児童生徒数を合わせた人数で示しています。

中学校は令和10年頃から急激な生徒数

中学校では、令和10年度あたりから、急激に生徒数が減少していきます。令和19年度には、どの中学校も、現在の半分程度の生徒数となる見通しです。

市立中学校別生徒数の推移



	H16	H19	H22	H25	H28	R1	R4	R7	R10	R13	R16	R19
● 江田島中学校	192	156	175	167	155	141	132	121	130	118	97	65
● 能美中学校	154	173	183	143	143	132	122	137	135	100	82	67
● 大柿中学校	212	182	132	123	100	82	63	70	87	62	47	42

12年後（令和19年度）各学校学年別生徒数見込

江田島中学校



	1年	2年	3年	計
男	7	19	13	39
女	8	8	10	26
計	15	27	23	65

能美中学校



	1年	2年	3年	計
男	8	10	14	32
女	13	11	11	35
計	21	21	25	67

大柿中学校



	1年	2年	3年	計
男	5	9	9	23
女	10	4	5	19
計	15	13	14	42

※児童生徒数に関しては、令和7年度までは5月1日時点の人数、令和8年度以降は、住民基本台帳に基づき算出しています。
そのため、ここに示した生徒数は今後変化する可能性があります。

※通常学級及び特別支援学級の児童生徒数を合わせた人数で示しています。

の減少を迎えます

【参考】

本市における平成16年以降の学校統合の経緯について

本市は平成16年11月、江田島町、能美町、沖美町、大柿町の四町が合併し誕生しました。

合併時は小学校16校、中学校6校、合計22校あったものの、今後の児童生徒数の見込みから、学校統合が避けられない状況にありました。

本市における学校教育の充実と活性化を図るため、江田島市長は、平成17年、平成21年の二度に渡って江田島市学校統合検討委員会に諮問を行いました。

江田島市学校統合検討委員会の第1次答申、第2次答申に沿って学校統合を進めた結果、小学校6校、中学校3校となりました。



平成16年度以降の学校規模適正化（学校統合）の状況

枠内の数字は児童生徒数

学校名 年度	平成															令和												
	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7				
大須小学校	18	17	17	12	→ 切串小学校																							
津久茂小学校	46	46	65	59	63	→ 江田島小学校																						
宮ノ原小学校	56	55	51	40	36	→ 江田島小学校																						
秋月小学校	31	34	28	24	→ 江田島小学校																							
小用小学校	71	60	52	45	43	→ 江田島小学校																						
高田小学校	68	65	72	78	76	73	69	69	59	51	51	51	→ 中町小学校															
沖小学校	51	40	32	28	25	→ 鹿川小学校																						
大君小学校	36	40	40	39	40	42	41	→ 大古小学校																				
柿浦小学校	122	111	103	89	77	73	61	59	55	47	47	43	46	43	38	29	23	→ 大古小学校										
飛渡瀬小学校	81	70	66	65	66	68	57	58	54	43	→ 江田島小学校																	
切串中学校	68	55	49	45	46	46	44	→ 江田島中学校																				
三高中学校	53	61	51	46	31	29	33	44	47	40	42	42	52	41	38	28	23	31	30	32	25	19	13	→ 能美中				
沖中学校	31	34	32	23	→ 能美中学校																							

児童生徒の減少による影響

江田島市の小中学校は、国の基準に当てはめれば、全てが小規模校です。

小規模校であっても、ある程度の人数がいる場合は、いくつかのメリットがあります。

しかし、児童生徒の減少に伴い、学級数まで減少するようになった場合には、いくつかの大きな問題が生じます。

ここでは、一般的に言われている小規模校のメリット・デメリット、そして学級数が減少した際に生じる問題について説明します。

小規模校のメリット

- 一人一人の学習状況や学習内容の定着状況が把握しやすくなります。
- 補充指導や個別指導を含めたきめ細かな指導が行いやすくなります。
- 学級での人数が少ないため、意見や感想を発表できる機会が多くなります。
- 様々な活動において、一人一人がリーダーを務める機会が多くなります。
- 複式学級においては、教師が複数の学年間を行き来する間、児童が相互に学び合う活動を充実させることができます。
- 運動場や体育館、特別教室などが余裕をもって使えるようになります。
- 教材・教具などを一人一人に行き渡らせやすくなります。例えば、ＩＣＴ機器や高価な機材でも比較的少ない支出で全員分の整備が可能となります。
- 異年齢の学習活動を組みやすい、体験的な学習や校外学習を機動的に行うことができるようになります。
- 地域の協力が得られやすいため、郷土の教育資源を最大限に生かした教育活動が展開しやすくなります。
- 児童生徒の家庭の状況、地域の教育環境などが把握しやすいため、保護者や地域と連携した効果的な生徒指導ができるようになります。

小規模校のメリット・デメリット

小規模校のデメリット

- 男女比の偏りが生じやすくなります。
- 班活動やグループ分けがしにくく、同じメンバーになりやすくなります。
- 体育科の球技や音楽科の合唱・合奏のような集団学習の実施が難しくなります。
- クラス替えが全部又は一部の学年でできなくなります。
- 同じ学年のクラス同士が競い合ったりする教育活動ができません。
- 習熟度別指導などクラスの枠を超えた多様な指導形態がとりにくくなります。
- クラブ活動や部活動の種類が限定されます。
- ずっとクラスが変わらないため、人間関係の固定化が懸念されます。
- 教科等が得意な子どもの考えにクラス全体が引っ張られがちになります。
- 生徒指導上課題がある子どもの問題行動にクラス全体が大きく影響を受けることがあります。
- 児童生徒から多様な発言が引き出しにくく、授業展開に制約が生じます。
- 教員と児童生徒との心理的な距離が近くなりすぎ、過度に依存するようになる可能性があります。
- 複式学級の場合、兄弟姉妹が同じ学級になり、指導上の制約を生じる可能性があります。

学級数減少で生じる課題について

複式学級の成立などにより学級数が減少すると…

◆ 教職員の配置の問題

広島県では、小学校で全ての学年が複式学級となった場合、県から配置される教員の配置は2名となります（特別支援学級は除く）。そのため、教頭が担任を兼務しなくてはならなくなり、担任業務の時間を十分とれない状況が生じる場合があります。

◆ 教育の質の問題

複式学級は、二学年を同時に指導することが求められるため、特別な指導技術が求められます。そのため、経験の少ない若手の教員の配置が難しくなり、年齢バランスのとれた教員配置ができにくくなります。

また、複式学級は、複数学年の教材研究・授業準備を行うこととなるため、担任の負担が大きくなり、結果として各学年の内容に十分な時間を注ぐことが難しくなる場合があります。

中学校では、県から配置される教員の数が減少し、教科によっては他校との兼務や非常勤講師の確保が必要となります。

◆ 校務負担の増加

学級数が減っても校務や学校行事等が減るわけではないため、教員一人当たりの負担が重くなります。

【参考】学校の定数（教諭等の数）について

小学校、中学校の教員は、学校の学級数に応じて県から教員が配置されます。その際の学級数に応じた教員の数を定数と言います。学級数が少なくなると、それに応じて教員の定数は減っていきます。

【校長】原則として、本校に1人 【教頭】3学級以上の小学校に1人

2学級以上の中学校に1人

【教諭等】

学級数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
小学校(人)	1	2	2	4	5	6	8	9	10	11	12	13
中学校(人)	4	5	7	7	8	9	11	13	14	16	17	18

※中学校においては、上記基準表に示す配当数のうち、下表の数を音楽科、美術科及び技術・家庭科を合わせた教諭等分として配当する。

学級数	1～6	7～9	10～14	15以上
配当数	1	2	3	4

・小学校は、全学年複式になると教諭は2人の配置となります。

・中学校は、全教科の教諭を定数でそろえるには9学級以上必要です。

【適正規模・適正配置に関して】

児童生徒が集団の中で、多様な考えに触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて一人一人の資質や能力を伸ばしていくという特質を踏まえると、学校については、一定規模を確保することが望ましい。

1 基本的な考え方

- 学校規模適正化の検討は、児童生徒の教育条件をより良くする目的で行うべきもの。
- 学校統合を行うか、学校を残しつつ小規模校の良さを活かした学校づくりを行うか、休校した学校の再開を検討するなど、活力のある学校作りをどのように推進するかは、地域の実情（学校が都市部にあるのか過疎地にあるのか等）に応じたきめ細かな分析に基づく各設置者の主体的判断。

2 学校規模の適正化

- 学校小規模化の影響について、学級数の観点に加え、学校全体の児童生徒数やクラスサイズ等の様々な観点から整理

【学校小規模化の影響の例】

(学校運営上の課題)

- ・クラス替えできず人間関係が固定化
- ・集団行事の実施に制約
- ・部活動の種類が限定
- ・授業で多様な考えを引き出しにくい 等

(児童生徒への影響)

- ・社会性やコミュニケーション能力が身につきにくい
- ・切磋琢磨する環境の中で意欲や成長が引き出されにくい
- ・多様な物の見方や考え方に対することが難しい 等

- その上で、学校規模の標準（12～18学級）を下回る場合の対応の大まかな目安について、学級数の状況毎に区分して提示。

【提示例】

小学校（1～5学級）複式学級が存在する規模

概ね、複式学級が存在する学校規模。学校全体の児童数や指導方法等にもよるが、一般的に教育上の課題が極めて大きいため、学校統合等により適正規模に近づけることの適否を速やかに検討する必要がある。

中学校（3学級）クラス替えができない規模

一般に教育上の課題があるが、学校全体及び各学年の生徒数に大きな幅があり、生徒数が少ない場合は特に課題が大きい。このため、生徒数の状況や、更なる小規模化の可能性、将来的に複式学級が発生する可能性も勘案し、学校統合等により適正規模に近づけることの適否を速やかに検討する必要がある。

地理的条件等により統合困難な事情がある場合は、小規模校のメリットを最大限生かす方策や、小規模校のデメリットの解消策や緩和策を積極的に検討・実施する必要がある。

3 学校の適正配置（通学条件）

- スクールバス利用等、通学実態の多様化を踏まえ、従来の通学距離の基準（小学校：4km以内、中学校6km以内）に加えて、通学の基準を設定する場合の目安を提示。
⇒ 1時間以内を一応の目安として、市町村が判断
(適切な交通手段を確保し、遠距離通学のデメリットを一定程度解消する前提)

平成27年1月27日 文部科学省

「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」（要旨）より

発行／令和7（2025）年11月
問合せ先／江田島市教育委員会 学校教育課
〒737-2397 江田島市能美町中町4859番地9
TEL0823-43-1900
gakkou@city.etaljima.lg.jp